

平成29年度 附属小学校・附属中学校「教育相談室」活動報告

竹口佳昭

(キーワード：附属小学校・附属中学校 教育相談室 スクールカウンセラー実習 スクールカウンセラーだより スクールカウンセラー授業)

1. はじめに

鳴門教育大学（以下、本学）の附属学校園では、附属小学校・附属中学校を中心として「教育相談室」が運営されている。

平成13年度から、附属学校園には本学の臨床心理士の資格をもっている教員がスクールカウンセラーとして配置されていた。平成27年度からは生徒指導支援センターの設置に伴い、生徒指導支援センター研究員の著者が附属小学校・附属中学校の専属のスクールカウンセラーとして配置された。

本報告では、平成27年度・平成28年度の報告と同様に、平成29年度の「教育相談室」活動を、附属小学校・附属中学校におけるスクールカウンセラーの活動、スクールカウンセラー実習、スクールカウンセラーだより、スクールカウンセラー授業の4点から報告する。

2. スクールカウンセラーの活動

(1) 活動形態

著者が附属小学校に毎週金曜日に週1回10時から17時までの6時間、附属中学校に毎週水曜日に週1回10時から17時まで6時間、スクールカウンセラーの活動に携わった。

カウンセラーの活動は附属小学校・附属中学校とも教育相談室で行った。

(2) 活動回数、相談人数、相談件数、相談内容

活動回数は、附属小学校が43回、附属中学校が42回であった。

平成29年度のスクールカウンセラーの相談人数、相談回数は表1・表2の通りである。

表1 平成29年度の附属小学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
児童	7名	14回
保護者	16名	82回
教職員	15名	60回
計	38名	156回

表2 平成29年度の附属中学校の相談人数・相談回数

面接の対象	相談人数	相談回数
生徒	13名	87回
保護者	9名	67回
教職員	11名	79回
計	33名	233回

* 授業4クラス

* 家庭訪問 18回

1) 附属小学校での相談について

附属小学校の相談人数は、全体で38名であった。内訳は児童が7名、保護者が16名、教職員が15名である。昼休みや放課後に遊びに来室した延べの児童数は、1学期が175人、2学期が95人、3学期が67人、1年間では337人であった。

相談回数は、延べ156回であった。このうち児童が14回、保護者が82回、教職員が60回であった。なお、養護教諭は毎回情報交換をしているので、このデータには含まれていない(表1)。

児童の相談件数は7件で、相談内容は学習についての相談が4件で、友人関係についての相談が2件、いじめについての相談が1件であった。

保護者からの相談は16件で、相談内容は子育てについての相談が9件と最も多く、不登校・親子関係についての相談が各3件、いじめについての相談が1件であった。

2) 附属中学校での相談について

附属中学校の相談人数は、全体で33名であった。内訳は生徒が13名、保護者が9名、教職員11名であった。

相談回数は、延べ233回であった。この中で生徒は87回、保護者が67回、教職員が79回であった。なお、養護教諭は毎回情報交換をしているので、このデータには含まれていない(表2)。

生徒の相談件数は13件で、相談内容は不登校・いじめが各4件と最も多く、友人関係についての相談が3件、家庭問題についての相談が2件であった。

保護者の相談件数は9件で、相談内容は不登校についての相談が6件、子育てについての相談が2件、発達についての相談が1件であった。

2名の不登校の生徒の家庭訪問を、それぞれ11回と7回行った。

(3) 活動内容

1) 活動内容の概要

附属小学校の活動内容は、児童・保護者との個別面接、教員へのコンサルテーション、昼休みや放課後の児童とのプレイ、授業中の行動観察、個別学習支援、給食時間の昼食参加、いじめについての研修会である。

附属中学校の活動内容は、生徒・保護者との個別面談、教員へのコンサルテーション、不登校児童宅へ家庭訪問、「いじめ」の授業、生徒指導委員会への参加である。

2) 生徒指導委員会(附属中学校)

活動内容の概要に述べた生徒指導委員会について、以下に述べる。

① 組織

生徒がよりよい方向に成長するように、教員が生徒により効果的な指導を行う方法について話し合う目的で発足した。構成員は、学校長、教頭、主幹教諭、生徒指導主事、該当生徒の学年主任及び担任、養護教諭、鳴門教育大学いじめ防止支援機構長、著者である。なお、鳴門教育大学いじめ防止支援機構長と著者は、平成27年度から参加した。

② 会合及び内容

会合は年2回、2時間半程度行われる。各学年の担任から指導援助を特に必要とする生徒についての関わり経過等が報告され、質疑応答が行なわれる。その後、鳴門教育大学いじめ防止支援機構長が生徒指導の立場から指導助言を、著者が臨床心理学的な立場から、生徒や保護者や教員の心の動き等について助言を行った。

3. スクールカウンセラー実習

本学臨床心理士養成コースの実習の一つとして、スクールカウンセラー実習があるが、平成27年度から附属学校園でもスクールカウンセラー実習の受け入れを開始した。3年目である平成29年度は、附属中学校で2名、附属小学校で2名が実習を行った。

附属小学校の2名は、スクールカウンセラーの面接に陪席して記録をとった。昼休みや放課後、児童とゲームをして、会話を通して児童とのこころの交流の回り方を学んだ。

附属中学校の2名も、スクールカウンセラーの面接に陪席して交互に記録をとった。教育相談室に来室した、様々な問題を抱えた生徒とゲームをしながら楽しみ、また時にはその生徒の内面に迫るような話をしながら、こころの交流の回り方を学んだ。家庭訪問にも同行し、不登校生徒やその保護者との関わり方を学んだ。

どちらの学校の実習生も、空き時間には、教員の職務内容やスクールカウンセラーの心構え、面接の振り返り等を行った。毎回、実習ノートに記録、感想を記入し、著者がコメントした。

ある実習生は、「実習を通してスクールカウンセラーとして働きたい気持ちが強くなり、実際に働けることを楽しみにしています。先生方とのコンサルテーションやケース会議に参加できたことや、授業を見学できたことがとても勉強になりました。」と実習ノートに記入していた。学校の文化を肌で感じるができることは、これからスクールカウンセラーになる院生にとっては大きな糧となった。

4. スクールカウンセラーだより

毎月1回「スクールカウンセラーだより」(巻末資料1)を計11回発行し、児童・生徒一人ひとりに配布した。これはスクールカウンセラーの活動や勤務日を保護者や児童・生徒に周知することと、児童期・思春期のころの動きや他人との関わり方や心理学の考え方を紹介することで、スクールカウンセラーに興味・関心を持ってもらうことを目的とした。

「スクールカウンセラーだより」である『こころこころ』を家族で読むのを楽しみにしていると話す保護者もいた。これからも発行を続けていきたい。

5. スクールカウンセラー授業



五十嵐かおる原作の「いじめ」というマンガ(陸上部女子部長の日富(加害者)が陸上部員の実咲(被害者)をいじめるという設定。実咲の友だちの優花とまあちゃん(傍観者)・陸上部員(観衆)等が登場人物)を著者が教材化し、附属中学校の2年生4クラスで授業を行った(資料1)。

様々な立場の苦悩を理解した上で、どの立場の生徒がいじめを解決すべきかについて考えた(資料2)。

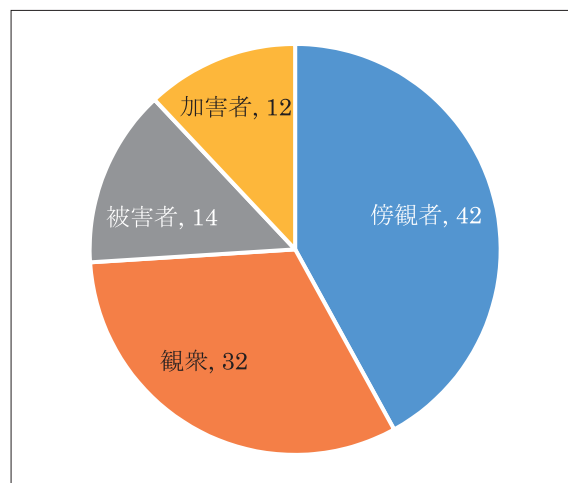
(資料1) いじめ教材の一部

「いじめの解決方法」を見つけ出そう

この資料は、漫画家の五十嵐かおるさんが、
2005年から雑誌『ちゃおデラックス』『ちゃお』に掲載した
「いじめ」シリーズの中の
「明日に吹く風」というお話しの前半部分です。
「明日に吹く風」は、小学館の『ちゃおコミックス』の
「いじめ〜ひとりぼっちの戦い〜」に収められています。
舞台は、ある中学校の女子陸上部、
そこで起きたいじめがこの漫画のテーマです。

(資料2) どの立場がいじめを解決すべきですか



〈解決すべき立場と意見の一部〉

(傍観者：42%)

・優花とまあちゃん(傍観者)が団結し、加害者の悪行を止め、いじめを止めさせる。

- ・優花とまあちゃん（傍観者）が先生に相談する。
- ・優花とまあちゃん（傍観者）が帰り道など部長に見られないところで相談にのり、実咲（被害者）とともに先生に相談する。他の陸上部員にも協力してもらうように提案して、解決する。

（観衆：32%）

- ・陸上部員（観衆）がいじめへの協力を止めて、全員で被害者を助け、加害者から守る。
- ・陸上部員（観衆）が加害者の一番身近な人だから、その観衆がいじめをやめて被害者の味方をしたり、加害者に注意したりすればいいと思う。
- ・陸上部員（観衆）が信用できる先生に相談する。

（被害者：14%）

- ・実咲（被害者）がいじめをされるのに屈せず、ずっと練習していたら、日富（加害者）があきる。
- ・実咲（被害者）が信頼できる人（親）に相談する。
- ・実咲（被害者）が陸上部をやめたり、転校したりして逃げる。

（加害者：12%）

- ・自分が何をしているかに気づき、深く反省し被害者に謝る。
- ・人間常に完璧でないから調子に乗ることもあるだろうけど、相手の気持ちも考えなければならないことを思い出し、自己を改めるべきだと思う。

〈生徒の感想〉

- ・人に頼ることが大切だと思った。
- ・いろいろな立場にたって考えることが大事だと思った。
- ・誰かが勇気を出せば解決する。
- ・周りの人が助けてあげることが大切だ。
- ・大人に介入してもらうことが大切だ。
- ・美咲（被害者）に直接話しかけたり、一緒にいたりする。形だけでなく、クラスや部活内の友だちに「いじめはよくない」と言って、間接的に美咲を守ってあげることが大事だ。

〈授業者の感想〉

- ・授業をすることで、様々な生徒の考えが理解できた。
- ・自分が「いじめ」の経験にあったと自覚している生徒と、自覚していない生徒との温度差が見られた。

6. 成果と今後の課題

上記の活動を通して感じた平成29年度のスクールカウンセラー活動の成果と課題について述べる。

(1) 成果

- ① 附属小学校・附属中学校の不登校児童・生徒は、全国平均の1.4%（文部科学省2017）に比べて下回る。その少ない不登校の児童・生徒や保護者と面接を行ったり、家庭訪問をしたりすることで、不登校児童生徒やその保護者の心の安定につながった。
- ② 教員は、著者とのコンサルテーションを通して、児童生徒の今後の指導の方向性について、教える立場とは違う角度からの考え方を知り、一緒に検討することができた。
- ③ 著者が「いじめ」の授業をすることで、生徒とよい関係性を築くことができ、気軽に笑顔で挨拶できるようになった。
- ④ 附属小学校では、たくさんの児童が昼休みや放課後に相談室を訪れた。スクールカウンセラーとスクールカウンセラー実習生が話を聴いたり、ゲーム等をしたりすることで、来室した児童は明るく元気になり、教室に戻っていった。
- ⑤ 今年度から、ケース会議を小学校と中学校でそれぞれ2回行った。各ケース会議では、筆者がコーディネーターとなり、先生方がケースを発表した後にグループごとに討議し、その後大学教員3名がそれぞれコメントを述べた。先生方は、同僚と話し合うことができたので、孤独感から解消された。また、チームで助け合うことの大切さを実感することができた。さらに、大学教員の新たな視点を得ることができた。

(2) 課題

かしま（2006）は「こころの健康さ」を見つけ出す作業がスクールカウンセリングの仕事のスタートであると述べている。著者も生徒指導委員会やコンサルテーションにおいて、どれだけ多くの子どもたちの「こころの健康さ」を見つけ、伝えているかという点と心許ない。もっと多くの「こころの健康さ」をたくさん見つけ、伝えるようにしていきたい。

スクールカウンセラーと教員が、職員室で雑談できるような関係性を構築し、子どもたちが元気で楽しい学校生活を送ることができるように、スクールカウンセラーがより積極的に動いて子どもたちのプラス面を伝えていきたい。

次に、小学校では、多くの児童が昼休みや放課後、相談室に来室するので、悩みの相談で来室した児童が、他の場所で相談をするという事態にもなった。相談しやすい雰囲気にはなっているのだが、場所の確保が問題である。

多くの子どもたちが、親の期待に応えようとして黙々と頑張り続けている。彼らのなかにはストレスが溜まり、それを上手に出せない子どももいる。そのため、身体症状として表れたり、行動化したりするケースも見られる。小学校の高学年から多く見られるようになるので、小学校の5年生と、中学校の1年生の全員と面接を行い、ストレスの軽減につなげていきたい。

村瀬（2013）は、これからのSCは自分の立ち位置に、いつもより意識を向け、他の人たちとコラボレーティブにやっていくことが大切であると述べている。今後は、より多くの様々な職種の方々と、質のいい協力関係を構築していきたい。

引用文献

かしまえりこ・神田橋條治 スクールカウンセリングモデル100 創元社 2006 pp.11

文部科学省初等中等教育局児童生徒課 平成28年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果（速報値）について 2017 pp.62

村瀬嘉代子 学校が求めるスクールカウンセラー 東京学校臨床心理研究会 遠見書房 2013 pp.17

こころこころこころ

2017, 12, 1 (金)

附属中学校 スクールカウンセラー通信
竹口 佳昭

自分に何が出来るか！

『心理臨床の広場』という雑誌に掲載されていた漫画(てんてん こころの広場に行く：細川貂々作)に、次のようなことが描かれていました。

私が母親と共依存関係にあると気づいたのは、45歳の時でした。

『人を信じられない』『何でも悪い方に考える』『自分なんてこの世からいなくなった方がいい』私がそんなふうを考えるのは、自分がネガティブ思考クイーンという妖怪だからと思っていました。漫画家になる夢を叶えて、ベストセラーを出して必死に頑張ってきた私。でも気づいたら仕事が無くなってました。その時に声が聞こえたのです。『ね？だからあなたは何をやってもダメだって言ったでしょ?』 母親の声でした。

やっと私は気づきました。『もしかしてネガティブ思考クイーンの正体はお母さん?』

私はいろんなことを思い出しました。そういえば母は『人を信じるな』と言っていました。『何でも悪い方に考えるのがうまく生きる方法だ』と言っていました。そして私は『一度も母親に褒められたことがない』のです。

やはり私をネガティブ思考クイーンに育てたのは母でした。私は、そのせいでずいぶん暗い人生を送ってきたので、母に怒りを感じました。

『私の人生 返して～』

でも、怒っていても前に進めないことに気づきました。

過去に起きてしまったことに、いつまでも足を引っ張られてもしょうがないよね。その後、カウンセリングを受けて、今は、自分を認める練習をしています。



バーンという心理学者が『過去と他人は変えられない』という名言を残しています。

この漫画家の方を、お母さんは苦勞して、一生懸命育ててこられたと思います。しかし、お母さんも、お母さんのお母さん(祖母)から、ネガティブ思考をまた学んでこられたと思います。その祖母も……。だから、『悪いのは誰だ』なんて悪者探しをしても何もいいことはありません。原因を追求することも大切ですが、それより『これから自分がどうなりたいか!』『そのために何をすればいいか』を考えて実行した方が、自分にとって有意義なように思います。

一人では考えにくい時には、カウンセラーなど第三者を利用するのも1つの方法です。

12月来校予定

6日(水) ・ 13日(水) ・ 20日(水) 10:00~17:00

2017 Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School “Educational Counseling Office” activity report

TAKEGUCHI Yoshiaki

(Keywords : elementary school attached to university, middle school attached to university, educational counseling office, school counselor training, school counselor news, school counselor course)

School counselor activities have been carried out at Fuzoku Elementary School and Fuzoku Middle School Attached to Naruto University of Education since AY2001. From AY2015, school counselors have been dispatched from the Center for School Support of Guidance and Counseling. This report covers activity content, number of counseling cases, and other aspects of AY2017 activities and considers future challenges regarding the work of the “Educational Counseling Office” that primarily serves the elementary and middle schools.